ずいそう

変わりゆくもの

深　尾　康　三

私たちをとりまく社会では，あらゆるものが常に変化しつづけています。そうした変化を感じさせる出来事が毎年たくさん起こりますが，その根底には社会の価値観の変化があると思います。

日本人の価値観は，近年大きく変わってきたと思います。私はどちらかというと旧世代の価値観を代表する人間ですが，我々の世代の価値観は日本の国家・社会・生活が歴史的とも言えるスピードで発展してきた中で形成されたと言えます。これに対して，今日の価値観は一定水準に達してしまった社会でいかに自分の人生と生活を充実させるかに移っているのではないか。旧世代と新世代の価値観を対比すると，次のようなものでしょうか。

・物の充足の追求 → 生活・人生の豊かさの追求
・貯めてから買う → 買ってから返す
・人並みになれる喜び → 他の人と違っている喜び
・理性と是非で判断 → 感覚と好き嫌いで判断
・安くて長持ちが第一 → 自分らしさが第一
・付き合いと和を重視 → 自己ペースと不可侵を重視
・休暇は仕事の報酬 → 休暇は人生の一部
・労働・汗・根性の美意識 →金・スマート・感性の美意識
・男は仕事/女は家事 → 性別は役割適性に非ず
・子供は宝 → 同時に育児・教育を伴う責任

これらの変化は成熟社会の生態として自然のことであり，また起こるべくして起こっている変化なのかもしれません。我々にとって重要なことは，こうした変化をいち早く事業展開に取り入れることです。よく「事業の革新」といったことが口にされますが，それは決して「無から有を生む」ような飛躍的なものではなく，常に変化していくトレンドを先取りし我々の業務に反映させることで競合に先駆けて事業に結びつけることにあると考えています。

建設業においては，どのような変化があるでしょうか。例えば，法令の面だけを見てもこの10年で大きく変わってきました。省エネルギー法，建築基準法の性能規定化，工場立地法，緑化三法，消防法改正，土壌汚染法，リサイクル法，廃棄物関連処理法，耐震促進法など，実に多くの法規制の新設・改定がなされてきました。我々の産業に対して社会性を強く要求されるようになってきたことの現れだと思います。先の価値観の変化に重ねて考えるならば，これまでの建設産業の発展は，日本の国土・社会インフラストラクチャの高度化に追従した事業展開であり，我々建設事業者としては能動的な機会開拓よりリスクの低減が重要だったと言えます。しかし，一定の社会インフラストラクチャが充足した現在，新しい市場を自ら開拓する方へと比重を移すのはこれまた必然で，インキュベーションなどの成果を最大化するような考え方が必要ではないかと考えます。

私自身もそうですが，新しい提案に対して「これは良い」「これは良くない」と判断しますが，ややもするとつい本業的なセンスでしか見ていないことに気が付きます。新しいアイデアというものは，いかに新しいセンスで見て考えていくかが重要です。これは日々現実に追われる現業ではなかなか難しいことであり，そうした視点でアドバイス助言をすることが，技術研究所長である私の役割であろうと認識しています。

ただ，変化を知らせるシグナルは始めはごく小さなものであることが多いように思います。そして，そうした小さなシグナルを見落とさずに変化を察知することが重要で，新聞の一面を飾るような大きな事件になった時には事業への導入という面では手遅れと言えます。例えば，最近新聞の片隅で見かけたこんな小さなニュースが，実はすでに起こっている大きな変化を教えてくれているかもしれません。

・少子化により07年にはすべての生徒が大学に就学
・晩産化により育児と介護が同時になる
・ICタグで農産物の履歴を追跡
・子供の位置確認サービスのニーズ拡大

これらのシグナルから極度なテクノロジー依存症社会を想像することは，飛躍が過ぎるでしょうか。

経済環境も安定化の兆しにあり，建設各社の業績も回復基調にありますが，テクノロジー依存症社会で市場は何を求め，建設生産はどうあるべきでしょうか。そこには，技術を開拓し成長と発展を正義とする旧世代の価値観はあまり見出せないように思います。常に国土開拓の最前線で社会インフラストラクチャを造ってきた我々建設マンにとって，新たな社会での建設美学を探る必要があります。特にこれから建設産業を支える世代にとっては大変重要な問題です。変わりゆく価値観に合わせて新しい建設美学を創り出す事，それこそが最も重要なことなのかもしれません。

――ふかお　やすぞう　株式会社竹中工務店技術研究所長――